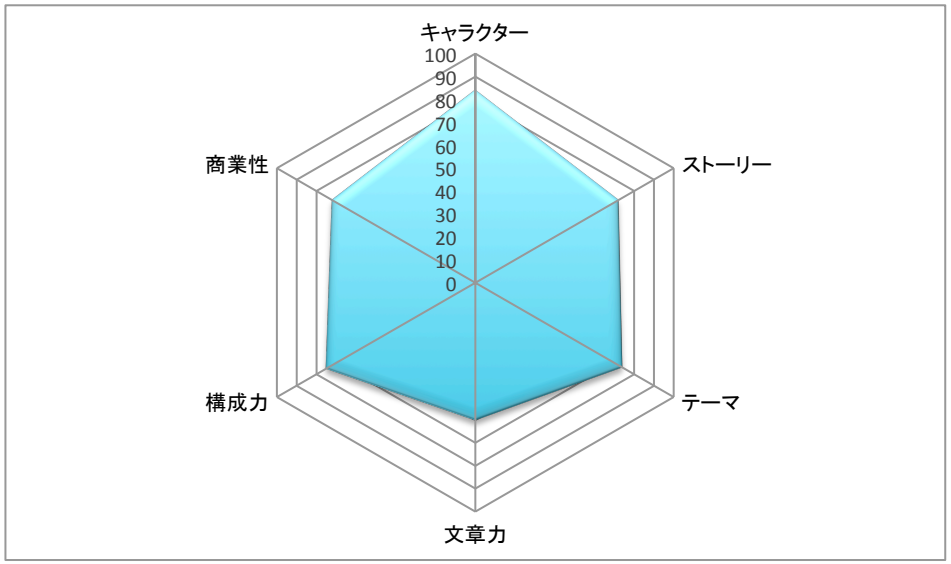
第1回　ライトノベル作法研究所主催　大夏祭り大会　選評評価シート

作品名：「死神シアター」　　テーマ：「死神なのに、映画とポップコーンが好きな美少女」

キャラクター	ストーリー	テーマ(設定)
84	72	74

文章力	構成力	商業性
60	75	72



・細かな点

△　冒頭の青城公園のシーンが上映中の走馬灯の画なのか十数年前の過去回想なのか分からず、読者が物語をスムーズに詠み進められない構成になっている。例えば、『木々に止まる蝉たちが、何かを囃し立てるように騒がしく鳴いていた。そこは見覚えのある公園だった。僕の住む町に昔からある『青城公園』。』の途中を、「スクリーンに映し出されたのは見覚えのある公園だった」に変えるだけでも、読者が想像しやすい文章に変えられる。

△　「のんべんだらり」の繰り返しの使用が若干気になった。キャラクターの口癖等（「ジャッジメントですの」「じちゃんの名にかけて」系）でない限り、言葉の繰り返し使用は避けて用語は言い換えた方が無難であると思われる。二個目の「のんべんだらり」を「ぐうたらな」に変えるなど。

○　子どもらしくポップコーンを食べながらも、暴力的なシーンを平気でポップなエンディングテーマで飾るという、人の死や痛みをなんとも思っていないようなギャップが強烈で非常に印象に残る。読む側としてははっきり好き嫌いが分かれるところではあると思うが、はっきり好き嫌いが分かれるくらいのぶっとんだキャラクターを描けているという点で非常に評価が高い。＋2

×　花菜が殴られ続けて、その結果彼女が死んでしまったのかどうかをはっきりと明示させた方が良い。できるならば殴られているシーンが終わってすぐその事実を明確にさせるべき。「花菜を助けることはできるんだよね？」という主人公の言葉が「花菜が死んだという過去を書き換えることができるんだよね？」という意味なのか、「生きているが今絶命寸前になっている彼女を助けることはできるんだよね？」という意味なのかで物語の意味が変わってしまい、読む人によって解釈が変わるorどちらでとればよいのか分からなくなりイライラを感じる。例えば「そして乾ききった僕の唇から、蚊の鳴くような呟きが漏れた」のあとに、月城「花菜は無事なのか？」→ ネネ「結構な力で殴られ続けたので、あぶないですね」→月城「まさか死んだ……？」→ネネ「まだ何とか生きてますが、このままでいくと次にこのシアターにくるのは彼女でしょうね」などと挿入すれば、死に際にいるという情報に加えて多少の緊張感も加わり面白くはならないだろうか（逆に話がしつこくなってしまう可能性も否めない……正直やってみないと分からない）

・総評

死神×シアターという設定が良い。非常にオリジナリティに溢れていて、この作品にしかないと思える面白さがある。まず冒頭では、死神シアターを通じ「恐らく主人公は死んでいるor死にかけている。一体何があった？」と読者に一つの疑問を与え、一方で作品上では小さな青春物語が続くというアンバランスな構成が巧いと感じた。読者が読むのを中断しにくい仕組みとなっていて良い意味での計算高さも感じる。一方で、折角出したネネという強烈なキャラクターがシアター内のみに完結し、事実上物語のMCのような役割で終わってしまった点が悔やまれる（恐らく50枚制限のせいだとは思うので、長編にできたらキャラクターの深堀りができてもっと面白くなると思われる）。またコンビニシーンも無理に短くしようとしたからなのか、展開が早過ぎてついていけなかったり花菜の言動に不自然さが目立つ点が多かった。文章のリズムにも安定感がないため、前半の青城公園のシーン等を削って後半に余裕をもたせればこの不自然さは解消される可能性がある。

合計加点ポイント：2

総得点：　437 / 600

B方式総合得点：　32028 点